

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
 神奈川 碩心会 発行

現在会員数
 2年7月地区 157名
 返子地区 262名
 葉山地区 47名
 大船地区 (合計) (466名)

2年7月号(216号)
 発行 者 根岸 岳 萃
 編集 者 中村 愛 岳

県本部新役員きまる

6月24日(日)平塚農業会館に於て総会が行われ、役員改選があり、左記のように決定しました。

本部長 新田 岳悠 事務局長 佐藤 岳昭
 副本部長 根岸 岳萃 横一地区長 佐藤 岳誓
 " 岡嶋 岳風 横一 " 千葉 颯 岳
 " 安孫子 岳晴 京浜 " 高橋 岳濤
 相談役 松井 岳洋 湘南 " 佐藤 岳欽
 " 諸留 岳城 経理部長 鈴木 岳順
 " 長谷川 岳聖 教務部長 石毛 岳象
 " 常盤 岳湘 広報部長 渡辺 岳允
 監事 宮崎 岳義 許証部長 佐藤 岳統
 " 中島 岳湖 庶務部長 鹿嶋 岳久
 審査委員長 草野 岳穰 企画部長 立平 岳昇
 " 副委員長 覚張 岳環 青少年部長 加藤 岳心
 " 橋川 岳瑋
 尚碩心会から左記の方々が副部長に任命されました。
 青少年副部長 加藤 圭岳
 許証 " 中村 幸岳
 事務局次長 竹石 憲岳
 広報副部長 中村 愛岳

県本部主催 指導者吟道講座御案内
 平成二年度

とき・8月19日(日) 受付9時・開講9時25分
 ところ・横須賀市防衛大学校中ホール

(時間) (講師) (課題) (頁数)

(1) 9:40 橋川 岳瑋 (漢詩・赤壁・31
 10:30 " " (漢詩・老泣・21
 3380)

(2) 10:40 安孫子 岳晴 (短歌・こだま・朗一
 11:30 " " (漢詩・花すすき・朗一
 5676)

(昼食休憩50分・弁当ウーロン茶支給)

(3) 12:20 覚張 岳環 (漢詩・慈烏・31
 13:10 " " (漢詩・夜啼く・朗一
 108)

(4) 13:20 草野 岳穰 (新体詩・昨日にま・114
 14:10 " " (漢詩・さる恋し・朗一
 114)

(5) 14:20 松井 岳洋 (漢詩・春江花月の・愛一
 15:30 " " (漢詩・夜・朗一
 141)

(6) 15:40 新田 岳悠 (指導研修に当って
 16:00 " " (漢詩・夜・朗一
 141)

- ◇準師範以上の指導者
- ◇吟道手帳・筆記用具を忘れずに
- ◇講座テキストが配布されます
- ◇参加費七百元
- ◇申込〆切7月20日

故千葉岳香先生

吟魂碑に合祀さる

七月一日、諏訪地蔵寺に於て岳風忌が行われ、碩心会から故千葉岳香先生が吟魂碑に合祀され、御主人の親岳先生が列席されました。御冥福を心からお祈りいたします。

全国青少年

神・静地区

吟道大会参加

去る六月三日、防衛大学中講堂に於て、右大会が開催され、碩心会より左記の方々が、出場されました。

独吟	九月十三夜	逗子A	中村亜希子
詩舞	祝賀の詞舞	堀内・E	三橋 香泉
	"	"	西岡 玉泉
	吟	逗子A	村田 滯岳
	"	逗子B	立沢 御岳
合吟	太平洋	一色A	秋吉 笙風
	"	"	川口 喜風
	"	"	角田 松風
	"	"	鈴木 葉山
	"	"	奥野 敏山

十周年に寄せて

堀内支部・E 高井定風

梅雨時の六月十七日、この日は朝から素晴らしい天気恵まれ、私共「碩心会E班矢嶋教室、十周年記念の集い」を葉山町福祉文化会館にて、開催することができました。

幸いにもご招待申し上げた先生方には、根岸岳萃先生をはじめ、全先生ご出席戴き、盛会の裡に無事終了できました事を、厚く御礼申し上げます。

思い起しますと、昭和五十五年の初夏、小西さんと連れ立って、矢嶋教室に伺ったのは、ある日曜日の午後でした。教本をいただき、始めて練習したのは「九月十日、菅原道真」子供の頃から「天神様」として、親しみを感じておりましたもの、詩吟については、全く無知を私達でしたので、先生もさぞかし大変だったと思います。

身体を固くして、声も思うように出ず、出るのは冷汗ばかり。何度も反復けいこをしていただきながら、少しでも先生の吟に近づきたいと、顔を真赤にして勉強したことが昨日のように思い出されます。

あの当時は、五、六人の吟友でしたが、

皆、日曜日を楽しみに教室に集って、一人ずつ順番に吟じたり、音の取り方、余韻の引き方、語尾を母音にかえすこと、腹式呼吸等々、基本的な細かい注意をいろいろと教えていただきました。

そのうちに、矢嶋先生のご指導ぶりを聞いて吟を志す友も二人、三人と数を増し、今では二十余名の大家族になりました。木曜教室、金曜教室、日曜教室とそれぞれ異なりますが、先生を中心に頑張っております。

この度のこの行事が、遂行できましたのも、諸先生や、先輩の皆様の温かいご協力は勿論のこと、悦岳先生の献身的なご指導と、若い方達の惜しみない労力があつたからこそと、只々感謝で一ぱいでございます。十周年を迎えて初心に戻り、古参、新参を問わず、老いも若きも無く、お互いに手を取り合い、励ましあつて吟道に精進して行きたいと思っております。

どうぞ今後共よろしく、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



二枚の許証を手にして

大船A支部 山口夕岳

去る六月の県本部の総会の折に、私は二枚の許証を戴きました。一枚は準師範、もう一枚は十段の二枚です。

入会した当時、十段の許証を戴ける様になるなんて、ましてや、指導者の立場になるなど、夢にも思ってみませんでした。私の初めての審査は二段……それから一年毎に、初伝、三段と上っていききましたので、奥伝までには八年かかりました。その時々、審査会場でドキドキした思いが、手許にある十二枚の許証の中に込められて、思い返せば懐しい思い出の一シーンです。

二段の許証より今日まで、23年の月日が流れ、其の間には一年と云う空白の日々もあり、自分の吟への嫌悪感に、幾度となく罷めようと思つた事でしょうか。でも何とか乗り越えて、今日までの道程を歩んで来られましたのも、良き先生に恵まれ、暖かい先輩の方達に、御指導戴きました結果と、深く感謝申し上げます。

今は指導者として、未熟ながら精一ぱいの努力の日々を重ね、私の所へ楽しみに来て下さる方達と一緒に、吟の勉強をして行

き度いものと思っております。吟道発展のために、少しでもお役に立ちましたら、望外の喜びでございます。今後共よろしく御指導お願い致します。これからの人生、健康に注意して頑張つて行くつもりです。

西郷と「敬天愛人」

日曜の夜、久々にテレビドラマ「翔ぶが如く」を見ることができた。そして沖永良部島での、西郷と川口雪蓬との出会いを演じていた。川口雪蓬は書家であり、陽明学者であり、又詩人でもあった。西郷はこの雪蓬との出会いにより、猛烈に勉強をはじめ、又詩を作ることも学んだ。（これ以前の西郷は詩を作っていないという）そして書も学んだ。

西郷は月照と入水して、自分だけが生き残ったということは、当時の武士として大変だったと思う。西郷家の家族や友人らは、彼の目の届くところから、いっさいの刃物を隠したと伝えられています。

しかし、沖永良部島に於ての雪蓬との出会いにより、人間の運命は、すべてこれ天の賦与で、素直に従つて、しかも充分に生かす切ることだということを悟つた。

西郷の有名な「敬天愛人」の書をみた人

は多いと思うが、この思想もそこから生まれ育つていったと思う。

敬天愛人

松口月城

敬愛の二字意正純

想い見る南洲の斯の精神

至誠一貫聖哲の如し

氣宇崇高惟れ達人

尊王愛国肝胆を砕き

完成す明治の大維新

英雄遠く去つて再び出でず

城山の嶺上月一輪

西郷という人は、人を人として扱ひ、真心をもって敬愛する。そういう、人を人として愛し接したというところに、西郷の人情政治家としての良さがあつたと思うが、のちにそれが受け入れられなくて、大久保や伊藤の冷冽な実行力が、あの時代を推進することになったのだと思う。愛岳

松口月城

明治21年、昭和56年没。福岡市生れ。医師、作詩家。医師として活躍するかたわら詩作にふけり、昭和49年、詩作を通じ吟詠の普及振興に尽くした功績により文部大臣表彰を受く。著書に「松口月城詩集」あり。

練吟
メモ

源実朝の歌

○ 荒磯に浪の寄るを見てよめる

源 実朝

大海の磯もどろによする波

われてくだけてさけて散るかも

(金槐和歌集・雑)

昭和五〇年三月葉山町発行の「葉山町郷土史」によれば、右の和歌は、鎌倉幕府三代將軍源実朝が、建保五年(一一二七)葉山の燈摺海岸(今の葉山マリーナ附近・當時は大磯と称していた)で観月の宴を催した時の作という。(佐々木信綱説)

○実朝の歌は(1)新古今風、無常厭世の作と(2)万葉風、調べ高く雄大な作と二方面あるが、特に万葉風の歌人として賞讃された。この歌は、次の「箱根路を」の歌とともに実朝の代表作であった。旧教本の「四季の吟詩集・黄本」に掲載してあったが、地元にとっては馴染深い歌である。ところが、近年の説は、この歌の雄大な調べの裏には自身の運命を予感したものである(すなわち、大浪(八時勢)に砕け散るであろう自分を冷徹に見つめている)ことから、二所詣の途次の伊豆山海岸での作であるとする説が有力である。

○

箱根の山をうち出て見れば浪のよる小島あり、供の者に此うらの名は知るやと尋ねしかば、伊豆のうみとなん申すと答侍りしをきよて

源 実朝

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や

沖の小島に波の寄るみゆ

(金槐和歌集・雑)

○教本の朗詠集では、上句が「わが越えくれば」に改められている。学者の間で相違はあるが、当時としては「わが」を用いていたようである。歌意は極めて明確で、実朝が(五十余騎を従え、箱根権現の参拝を終り伊豆山権現に至る)険しい箱根路を踏み分けて十国峠を越えた塗端、紺青の伊豆の海の展望が眼下に開けた時の驚き。見ると、沖の小島(初島)に静かに白波が寄せられているのではないか。(秋の紅葉した箱根を背景として、広々とした伊豆の海を見下している颯爽たる青年將軍の姿が目まに当りに見えるのである。(山上に歌碑がある))

○二所詣は実朝にとって重要な責務(八回参拝している)であった。数日の旅ではあるが、狭くて息苦しい鎌倉から解放されるもの、常に自分の運命を予見しつつつづけていた実朝の眼は、冷徹に自然を凝視し詠じてはいるが、孤独の影は極めて厳しい。

今年は県本部・傾心会共々改選の年に当り、新役員の紹介をさせて頂いたとききました。わが傾心会では、長年お骨折りにいただいた沼田、井沢、小峯、森田、秋元の五先生が勇退され、後進に道をゆずられました。長い間ほんとうにご苦勞様でした。会員一同、この紙上より御礼申し上げます。

又、新常任理事の先生方には順次抱負など書いていただけたら…と考えております。当広報部も山口、佐久間両副部長を迎え、内容充実、刷新等、がんばっていきたいと思っております。どうぞよろしく。

(入会)

577 和田恭子 逗子市山ノ根二一十一三五

(電)〇四六八一七一一一六七

(退会)

162 鷲山祐風(上山口) 312 菊川甫山(堀内・D)

429 岩田久泉(下山口) 481 奥村秀泉(上原)

544 平岩豊子(一色A) 557 荒井チヨ(長柄)

